



図書館だより

2014.5
No. 21

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

読書が拓げる無限の世界

太田博道

(学長)

新入生諸君、入学おめでとう。これから4年間、精一杯勉強し、精一杯青春を楽しんで欲しい。

今年2月27日の西日本新聞に衝撃的な見出しがあった。日く「大学生4割『読書ゼロ』」とある。文系学生の34%、理系学生の44%が読書ゼロということだ。学生生活実態調査で明らかになった結果である。出版ジャーナリストなる人のコメントに「社会にとって危機的状況だ。・・・日本は大変なことになる。出版界も大学も、読書啓発に努めなければならない」とある。その通りと思う。

体にとっての栄養源は、言うまでもなく食べ物である。バランス良く摂取することが必要だ。若い人には特にそうである。体の不調は誰でも感ずるし、食べなければ空腹になるので食べることはあまり心配ない。頭にとっての栄養は、読書である。大学の講義ももちろん頭の栄養であるが、読書とは些か趣を異にする。体にはバランスの良い食事が必要であることと同様に、頭にもバランスの良い栄養が必要である。人が生きていくためには知力と体力の両方が必須である。特に若いときには両方を健康に保つ栄養が必要であることは自明の理である。

昔の話であるが、私が大学生になった頃は、自宅外学生が住むのは、下宿か学生寮であった。下宿とは一般家庭の1部屋に住まわしてもらうことである。標準的には4畳半一間。部屋にあるのは、勉強机、本棚、季節外れの

衣類を入れる茶箱が3点セット。それにラジオくらい。私は他に、お湯を沸かす電気ポットとトースターを持っていた。大学の近くに住んで、3食とも学生寮の食堂で食べ、夜は空腹になるので、来る日も来る日もトーストを2枚食べていた。

高校のときに生徒会長をやった尊敬する友人がいた、イヤ、今でも親しい。その友人が自宅で浪人生活を始めた頃、「俺はこれから1日1冊本を読む」と書いた手紙をよこした。「浪人しながら、1日1冊か!」と感心し、自分も見習おうと考えた。1日1冊にはほど遠かったが、相当の数の本を読んだように思う。値段からいって、また数を増やすという邪道な考えもあったので、主として新書版と文庫本であるが、どの分野等と面倒なことは考えずに、本屋に行ってチョット面白そうというのを適当にという程度のいい加減さである。たまには、難しそうなタイトルの社会科学系の本を選んで、大学生たる者、これくらいは読まなくてはと、見栄を張ったりもした。

3年になると、実験実習、英語のテキスト、学生自治会室への出入り等で、本を読む時間は極端に少なくなってしまう。4年生後半の卒業研究が始まってから以降は、読書の時間を取るのには絶望的となった。定年後はゆっくり、と考えていたが、夢想もしなかった展開となり、当分お預けである。

本を読むことは、広い意味で大いに勉強になるが、そこまで固く考えなくても、見たこともない所へ行った気になれるし、歴史上の様々な人物に出会うこともできる。とても面白いこと間違いない。小さな画面に見入るのは止めて、もっと本を読んでみたらどうか。本を読む人と、小さな画面を見ている人では、

確実にこれからの人生が変わる。私達が学生の頃は、部屋にテレビもスマートフォンもなく、電話やeメールもゲームもなかった。こ

れは、今の学生諸君には想像し難いかもしれないが、幸せなことであったと言えそうだ。

新入生にとっての本図書館

柳田 芳伸

(附属図書館館長)

入学生諸子はテレビやゲームになれ親しみ、スマホやインターネットを自在に駆使、活用できる世代である。それゆえ総じて、高度な情報化社会への対応力の素地を既に身につけている。しかし他面、漫画や大衆雑誌、それに流行小説の類を除いては、これまであまり書物に接してこなかったように思える。私が担当する新入生セミナーでは、仕上げとして、受講生の各自に「いま最も興味を抱いている事柄」について調べ、分析した結果を自ら作成したレジュメを用いて発表してもらっている。その際に利用、参照されている資料は圧倒的にネット情報であり、書籍（印刷冊子体）から材をとった報告は非常に少ない。

インターネットの検索エンジンを始動させ、情報源を探索していくこと自体は何ら問題ない。むしろ関心事に向かったの主体的な踏み出しとして歓迎できる。けれども同時に、それは最初の第一歩にすぎず、しかも場合によっては砂上のものであるかもしれないということを感じておく必要がある。至便なネット情報（例えば、ウィキペディアの記述も含めて）には信頼性を欠くものが少なからず混在しているし、そもそもデータ化された情報は積み重ねられてきた人類の知的全財産の1パーセントにも及んではない。ネット情報を取り敢えずの1つの手掛かりにするには首肯できるけれども、それでもって事足りると自己満足に陥っているのには全く感心できない。



旧英国図書館（1753～1997年）の読書室。伸びやかで、創造的な空間であった。

大学で学ぶことは古典（最良のもの）、あるいは卓越した先行研究を見習って、吸収していくことから始まるといっても過言ではない。本図書館の主たる役割は入学者をはじめ、すべて学究の徒にその糸口を準備し、供することにある。こうした利用者の側で何を学んでいきたいのかがある程度はつきりさえしていれば、本図書館はレファレンス資料（出版年鑑や多種の文献目録など）を常備しているし、またレファレンス・サービス（適切な指南書探しの支援）をも提供できる。仮に探し当てられた文献があいにく本図書館に所蔵されていない場合であっても、それを保有している国内外の機関に利用の依頼をなすお手伝いをする。つまり、費用と時間を要しはするけれども、日本の最西端の大学にいても、稀覯書等の一部を除いて、各種のあらゆる資料をどこからでも取り寄せ、利用できるのである。利用者の絶えざる知的熱情の有無や、あるいはその強弱のいかんこそが肝要である。

もちろん本図書館の役目はそれだけではない。何を学びたいかが分からないまま入学し、そのまま在学している人達にはブラウジング（書棚に並んだ関連書籍を眺めながら着想する）の機会を付与してもいる。それぞれの書架に

は、選り抜かれた新刊書はもとより、既刊の絶版書、品切れ書、及び非流通本（自費出版書、私家本など）がずらっと列をなし、いわば小さな知のストックを形成している。それらを何気なく見やり、時にはその1冊を手にとり、物思いにふけ、そしていつしか時の経過も忘れてしまう一時を是非とも体験して欲しいと願っている。なお入館に際しての案内

書は一切不要であるけれども、図書館を効率良く利用しようとする強かな人には、井上真琴著『図書館に訊け』（ちくま新書、2004年）や千野信浩著『図書館を使い倒す』（新潮新書、2005年）、あるいは高田高史著『図書館で調べる』（ちくまプリマー新書、2011年）等が手頃な手引書であろう。

「精神的風土」としての新書

木村 務

（経済学科教授）

今年3月1日に放映されたNHKスペシャル“災害ヘリ映像は語る～知られざる大震災の記録～”は、仙台平野に押し寄せた津波で、わずか1メートルの高低差が避難の時間差となって生死の分かれ目になったことを検証していた。空から撮られた映像は、古い時代の堤防跡の道路に逃げ込み助かった乗用車を追っていた。私は津波の恐ろしさを改めて思い知るとともに、学生の頃に影響を受けた岩波新書を思い出していた。

それは古島敏雄著『土地に刻まれた歴史』（1969年）で、私たちが暮らしを営んでいる大地は千年以上に及ぶ先人達の労働の産物であることを入念な調査をもとに明らかにした書である。現代の社会経済活動は、干拓などの土地開発と灌漑・排水などの土地改良という大地に刻まれた歴史の上に築かれている。現在の大震災復興の苦闘も後世の人々の暮らしの礎となるはずである。

この書にはその頃好んで読んでいた小説家坂口安吾に関わる挿話がある。彼は新潟に生まれたが、幼年期の新潟の景観は暗く、常に心を圧するものがあり、後年、自身の「精神的風土」を友人に見せてやろうと上越線で清



図書館「新書コーナー」

水トンネルを超えて長岡付近に至ってみると、彼は意外と明るい景観を発見したというのである。この話に古島教授は興味をそそられ、彼が故郷を離れていた数十年間に行われた土地改良によって明るい景観に変わったのだと想像された。この挿話は、各地の土地に刻まれた歴史は、その土地に暮らす人々の「精神的風土」を形成していることを語っている。

私たちは、定かに意識できるわけではないが、数百年に渡って蓄積された先人達の遺産＝資産を継承して暮らしを営んでいる。私は当時大学院生で、農業史の教授の指導のもとにあつて土地改良などに関わる調査研究を手がけていたが、この書に啓発されて、日頃目には見えないが社会経済活動の基礎をなすモノに関心を深めていった。

その後私の関心は、人間社会の基礎をなす協同組織へと広がり、内橋克人著『共生の大地—新しい経済がはじまる—』（1995年）にも大きな影響を受けた。この書は阪神淡路大

震災の直後に出版されたが、丹念な現場取材をもとに内橋氏は、神戸大震災のあとに甦る地域は営利企業だけではない多元的な新しい経済であるとされた。これは、新自由主義が経済社会を席卷する時代にあって、NPO・協同組合などの協同組織が役割発揮する意義を明らかにした先駆的な書となっている。

この社会経済の基礎をなす組織についての関心は、宇沢弘文『社会的共通資本』（2000年）によってより深まることとなった。自然環境、農村、都市、教育、医療、金融などは、個々の経済主体によって私的な観点から管理運営されるものではなく、社会の共通資産として社会的・民主的に管理運営されるという、この書の制度学派的考え方は、それまでの私の関心と強く共鳴した。これは今日私が農村の協同組織のあり方を追究する時の理論的な

支えとなっている。

指導教官からは経済学の古典を読めと言われて何とか従ってはきたが、私が大きな影響を受けた書は、むしろ上記のような新書だったように思う。これらは私自身の考え方や研究教育活動に大きな影響を与え、ここに挙げた他にも、各時代の様々な数多くの新書に啓発されてきた。それらの中には私の「精神的風土」となっているものもある。

本学図書館には新書コーナーがあって、出版されたほとんどの岩波新書などを手にすることができるし、書店には多種多様な新書が並んでいる。私の「新入生セミナー」では、各自が選んだ新書を紹介するプログラムを一部に取り入れている。それは、心の琴線に触れ、自らの「精神的風土」となるような書と出会うことを狙ってのことである。

読書と中国語学習

秦 耕 司

(前地域政策学科教授)

私は県大で37年間中国語教育に携わってきましたが、この間県大の中国語教育は何度か大きく変わりました。それぞれ重要な変遷を経ながら退職前の7年間、実践力強化講座であるインテンシブ教育を担当できたことは、現在の日本の教育を考える上で、また大学における外国語教育を考える上で非常に有益でした。

外国語を学ぶ人たちは誰しも会話ができるようになりたいと思っています。しかしこの会話力というのが実はクセモノで、学生たちの言う会話力は、身の周りの簡単なことを中国語で話してみたい、というのが履修の目的のようで、ここが新しく学ぶ学問的な知的内容と体系を持った講義科目の学習と根本的に違うところでは。これが私たち教員が目指す

実践力養成教育と、学生たちが望む実践力習得の内容とレベルがかみ合わない点です。現地での会話体験を積んでいる担当教員の脳裏にある実践力教育と、受験対策授業に明け暮れて、コミュニケーション能力に必要な人間関係構築における基本的な体験も、自分の思想も芽生えていない新入生の段階での意識にある実践力学習では、両者の間にギャップがあるのはむしろ当然でしょう。ですから、会話力を身に付けるには、それに見合った努力が必要であるという最も当たり前のことが、学生の意識の内ですっかり空白になっているのは仕方がないと思います。語学研修で西安にいて兵馬俑（へいばよう）に行くなら、兵馬俑は中国語でどう発音をするか、予め辞典で調べて発音練習をしておくのが普通でしょう。ところが今の学生たちにはその意識すら芽生えていません。教員も学生もこのような現実と直面しているのです。この穴埋めを如何にするか。これは私たち教員の課題であると同時に、学習主体である学生のみなさんの自覚の変化と努

力に期待する点でもあります。AO入試を初め、私がインテンシブ教育で日頃最も意を注いだ点です。

質の高い高度な実践力を身に付けるには、それを可能にする素地基盤がなければなりません。その素地基盤とは、理解力、思考力、類推力、想像力、文章力、より広い知識と体験、基本的学力などで、それを造るのは読書力を柱とする日本語の力です。

以前出席不足で英語と中国語が失格となり留年した学生がいました。その学生は本が好きで毎日読んでいました。5年目によくやく授業に気持ちを向けるようになりましたが、中級講読の難しい文章を意外によく理解します。原文解釈において鋭い発言もします。訳文も非常にいいしっかりした日本語になっています。英語の先生も「あの学生はできるのになあ。」と言っておられました。他にも2年生になってから週に1冊読むことを自分に課してから英語が楽になり、力が向上したのが実感できるようになったというインテンシブの学生もいました。

私自身学生時代に中国語の学習が進むにつれて日本語の読書力と表現力をつけなければならぬと痛切に思うようになりました。小説に興味の薄かった私は小説を読むようになり、語彙力や表現力が向上するに随って、自分の中国語の理解力と生産力（作文力と話す力）に対する意識と意欲が変わりました。日

本語力の向上と外国語習得には相乗関係と相関関係があるのです。外国語を習得するには、その素地基盤の養成が基礎となることは明白です。それは日本語力です。総合力である会話力にはそれに加えて種々の体験も基礎となります。そしてそれを促進するのが知的興味です。文学作品の紹介解説を通して知的興味を引き出す本を3冊紹介しましょう。いずれも読書欲を駆り立ててくれる好著です。読みやすい順に、

- ・中村真一郎『小説入門 ー人生を楽しくする本ー』 光文社文庫
 - ・川端康成『新文章読本』（第4章以降）新潮文庫
 - ・白井吉見『小説の味わい方』 新潮文庫
- 実践力習得の中心となるのは音読力と一体になった読解力です。外国語を身に付けたいと思っている学生のみなさんには、入学後早いうちに長編小説を1冊集中して読まれることをお勧めします。きっとその後の中国語学習で意識が変わったことを感じられると思います。そして私が授業中によく話していたことは、どのような本でもいいから、今自分が読んでいる本の内容をお互いに友達に紹介し話し合うことほど効果のあるものはない、ということです。

みなさんの稔り多き学生時代を祈って退職の挨拶に代えたいと思います。

紹介したい本

長 沼 信 之

(地域政策学科教授)

私が推薦したい本はたくさんありますが、今回は、以下の二つを紹介したい。

ひとつは、江口 英一著『現代の「低所得層」』（上）（中）（下）、未来社、（1979-1980）

です。私は、本学で「社会学」「社会調査法Ⅰ」「社会政策」などの科目を担当していますが、20歳から45歳頃までは労働者調査（造船業・鉄鋼業）、被爆者調査などの社会調査を中心に研究をおこなっていました。そうした社会調査は母校の研究室をはじめとする多くの先生方と共同でおこなっていましたが、大学院時代江口英一先生の集中講義（ゼミ）を1週間受けたこともあって、社会調査の精神や考

え方、具体的な方法については江口英一先生の著作から学んだことが多いと思います。冒頭の3巻本は、そうした江口英一先生の著作の集大成と言われている文献です。江口英一先生はこの著作で「学士院賞」「野呂栄太郎賞」を受賞しており、我が国における「貧困」「失業」研究の第一人者であるとともに社会調査の理論と実践の真のパイオニアと言える存在です。

この文献の特に重要と思われる点は、私見ですが、第一に、複雑で高度な現代社会の「貧困」をとらえるために「社会階層」という用具を用い、現代の「貧困」のもつさまざまな要因を総合し一括して把握しようとしていること、第二に、その階層を「低所得者階層」「不安定就業階層」として把握するとともに、この階層が固定的長期的に再生産されていることを実証的に明らかにした点、第三に、貧困・失業が単なる偶発的個人的要因ではなく構造的に「奪われている」ことから生じていることを明らかにした点だと思います。

先生はしっかりとした理論的枠組みに基づき、徹底した聞き取り調査や観察・記録を一貫しておこなった稀有な研究者です。また、その一生を「不安定就業者」の研究と「貧困」の解消のためにささげた研究者でもあります。派遣労働者や契約社員の急増をはじめ、膨大な「非正規労働者」が拡大・再生産しつつあ

る今日、江口英一先生の著作にふれることは私たちにとって極めて有意義であると言えるのではないのでしょうか。

ふたつめに紹介したい本は、加藤敏春著『エコマネーの新世紀―「進化」する21世紀の経済と社会―』、勁草書房、(2001)です。

加藤敏春氏は、経済産業省関東経済産業局総務企画部長という職にありながら（その後、大学教員となる）、『エコマネー』という新しい「地域通貨」を提唱するとともに、多くの地域を訪れ実際に『エコマネー』にもとづく地域づくりに尽力した方です。紹介した本は、その『エコマネー』の理論と実際を集約した貴重な文献です。

この本は、これからの経済社会や地域社会において、「地域通貨」『エコマネー』が大きな意味を有することを具体的に述べるとともに、『エコマネー』を理論的本質的に説明することをおして、過去、現在、未来の経済社会のあり方や構造を解明しているという画期的な内容になっています。実体的な経済社会や地域社会が疲弊する一方国際的金融バブル経済が爆発しつつある現在、これからの経済社会のあり方を理論的実践的に研究しなければならぬ我々にとってこの本は貴重な示唆を与えてくれます。多くの学生が読まれんことを期待します。

「学生に勧めたい1冊」

宮地 晃 輔

(流通・経営学科教授)

2013年9月発刊の稲盛和夫著『燃える闘魂』(毎日新聞社刊)を、まだ読まれていない学生がいまいたら、ぜひ熟読してもらおうことをお勧めしたいと思います。本のタイトルからしてアントニオ猪木さんのことが書かれてい

る本と想像した人がいるかどうかはわかりませんが、同人とは全く関係のない本で、日本を代表する経営者によって書かれた本です。

稲盛和夫氏（以下、稲盛氏と称す）は、京セラや第二電電（現KDDI）の創業者であり、日本航空の再建に携わった経営者ですが、その経営思想は内外から注目され、後進の多くの経営者に影響を与えている人物であります。稲盛氏は、松下幸之助（パナソニック創業者）や本田宗一郎（ホンダ創業者）の影響を受け、

松下には経営者が思わなければ何も実現していかないこと、本田には現場主義の大切さを学んでいます。

稲盛氏は、ファインセラミックスを主力製品とする京セラを立ち上げた時に、京都一の会社になる、それができたら日本一の会社になる、それができたら世界一の会社になると強く意識をして、100メートルの短距離走のスピードでマラソンを走るような経営を行ってきました。一見、稲盛氏の行った経営は非常識で無謀に見えますが、そこには確固たる信念と他者を寄せ付けない圧倒的な努力が展開されています。

また、稲盛氏は、経営者として「利他」の考え方を重視して、経営者としての自らの判断が私利私欲ではなく、自社の事業が広く顧客のためになるのか、社会全体のためになるのかを日常より問い続けていたそうです。もちろん稲盛氏も人間ですから横柄な態度を取ってしまった日や調子のよいことを言ってしまった日があることを本人も他著で述べています。そのような日は、1人部屋で鏡に向かって反省の言葉を述べていたそうです。

さて、今日の日本社会は多面的な困難を抱えています。先進国中最悪の債務残高、世界に例を見ない高齢社会の到来、グローバル時代の中での日本企業の競争力の低下、若年層の失業問題、勤労者収入の低下、地球環境問題からの影響など、の問題を抱えています。これらの問題に対して無関係でいられる人は

皆無といってよいでしょう。私たち一人一人は、これらの問題に立ち向かわなければなりません。稲盛氏の言葉を借りれば、そのために「燃える闘魂」が必要になるのです。ぜひこの本を読んでみてください。

稲盛氏が私たちに述べたかったことの核心は、会社の経営であれ個人の生活であれ、あらゆる困難があるけれども、具体的な目標のもとに誰にも負けない努力をすることの大切さにあると思います。稲盛氏は経営者として現在のリーダーの在り方にも疑問をもっています。稲盛氏の疑問を私なりに解釈すると、できない理由を並べる経営者は多いが、どうやればできるかを考える経営者が少ないという現状に疑問を抱いているのではないかと思います。組織上のトップであっても実質的にはリーダーではない、そのようなリーダーの下ではいかなる企業も存続しないでしょう。紹介する本は、次のリーダーを生み出すためにも有用であり、そして何よりもこの本に何度も出てくる不撓不屈の大切さを知ること、そして、現在、日本社会が抱えている困難を乗り越えるためには、常識内の努力ではなく常識を超えていくような努力を必要とすることが理解できるでしょう。

この本は、日本企業・日本社会が抱える多くの困難を乗り越えていくために、一人一人が傍観者になるのではなく、当事者になるためのヒントを多く与えています。ぜひ、多くの学生にこの本が読まれることを願っています。

学生に勧めたい1冊

齋藤光正

(流通・経営学科准教授)

私が学生の皆さんに一読をお勧めするのはジェイムズ・L・アダムズの*Good Products, Bad Products* (石原薫訳『よい製品とは何か

ースタンフォード大学伝説の「ものづくり」講義』ダイヤモンド社、2013年) という本です。この本はアダムズがスタンフォード大学大学院で長年教えてきた「良い製品、悪い製品」という講義のメモをもとに著されたもので、ハードウェア製品の「品質」をテーマにしています。

さて製品の品質とは一体何を意味するので

しょうか。多くの人は通常その製品の性能とか機能のことを連想するかもしれませんが。本書では、品質を「ものが良いこと」という意味で捉え、ものの良し悪しをどのような基準で判断するかを考え、「良い」ということの本質を探っています。人はなぜBMWやベンツなら、他の車よりもはるかに高いお金を払ってもよいと思うのでしょうか。この場合、性能の良さということもあるでしょうが、他にもさまざまな理由が考えられます。製品の品質には性能や機能、信頼性、適合性、耐久性、サービス性など幾つかの品質要素があります。中でも最後に挙げている「美しさ」と「知覚品質」は製品がヒットする最大の貢献者であると著者は指摘しています。

本書に対する興味は、すごいと思われた製品がなぜ市場から消えてしまうのかという問題や、批判を受けながらも、長く愛され続けている製品があるのはなぜかという問題について、具体的事例を挙げながら、一つ一つ分かりやすく説明している点にあります。製品が市場から姿を消す理由として、その性能が悪かったり、値段が高過ぎたり、あるいはメンテナンスが難しかったり、とさまざまな要因が考えられます。著者はそのほとんどの場合、製品がユーザーに合っていないことに問題があると述べています。

企業がマーケティングをますます重視するようになったのは、品質のためには良いことでした。しかしそれが前例のない商品にはめっぽう弱いという指摘や、企業戦略に縛られているため、それを活用する際、関与する人たちの価値観によってバイアスがかかる、といったくたびりは学ぶ者にとって有益なメッセ

ージになっています。そしてとりわけマーケティングよりも優先すべき大原則として「製品は人に適合しなければならない」という主張は、より傾聴すべき点ではないかと思えます。アップルの最初の「ポータブル」コンピュータは、マーケティング調査をしたにもかかわらず市場で失敗してしまいました。それは顧客が本当に欲しかったものを提供しなかったからです。後に「小さな箱にコンピュータのできるだけすべてを詰め込む」という目標の下に開発された「PowerBook」シリーズは大成功を収めました。以前のマーケティングは「人は小さいものを好む」ということを見落としていたのです。

製品にみられる信頼性や耐久性、サービス性といった「パフォーマンス」と、生産者にとっての「コスト」、消費者にとっての「価格」は、切っても切れない関係にあります。一般に消費者は価格が安く、パフォーマンスが高いことを求めます。他方、生産者はコストが安く、価格が高く、パフォーマンスが他社よりも少し高くなることを望みます。企業は価格やコストに対する消費者意識を変えるために、ポイントカードやセール、キャッシュバック、クーポン、マイルージなどを通じて「お買い得」感をアピールしています。そんな中で著者は消費者の立場からコストや価格も、パフォーマンスと同じように製品寿命を通して考えるべきものだといっています。経済生活が一段と厳しくなる時代において、よい製品をどのような基準で選んだらよいかという知識を本書で是非とも身につけて欲しいと思います。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2014年5月23日